

2025 年 10 月 26 日（聖霊降臨後第 20 主日・特定 25、C 年）

メッセージ

「続・祈りについて」

（ルカによる福音書18: 9-14）

司祭ヨセフ太田信三

先週に続き今週も、イエスは「祈り」について語ります。今週のたとえでは、「うぬぼれている」人としてファリサイ派の人が登場します。ファリサイ派の人々は、律法をあらゆる現実の状況に当てはめ、具体的に解釈し、それを正確に守ろうとしました。しかし残念なことに、彼らはそれを守っているかどうか、という尺度で人の価値を決めてしまっていました。そして、「あの人と違って、私はこれができているから正しい」と、彼らはいつも誰かを罪人としなければ、自分たちの正当性を確認できませんでした。それゆえ、今日の福音におけるファリサイ派の人の祈りは、他者との比較で自分を神に認めさせようとする、単なる自己肯定の宣言のようなものになってしまっています。

他方、徴税人は遠くに立ち、神殿に登ることも、目を天に上げることもできず、胸を打ちながら祈りました。イエスの時代、徴税人はユダヤを支配していたローマ帝国のため、同胞のユダヤ人から税金を徴収する役目を担っていました。その役職につくために多額の資本を投じたとも言われ、それを回収するためにも、不正な方法で取り立てることもあったようです。それゆえ徴税人は、同胞であるユダヤ人に見れば支配国の手先、十戒の「盗むな、偽証するな」に照らせば、罪人に他なりません。

世間的に見て正しいのは、律法をよく学び、忠実に生きようとしたファリサイ派の人に決まっています。しかしイエスは、「義とされて」家に帰ったのは徴税人の方だと言います。義とされる、とは「神に善しとされる」とか、「神との正しい関係に入る」という意味です。それは今日の文脈で言うなら、どちらの祈りを神は喜ばれたか、ということでしょう。神の前で自分を誇ろうとしたファリサイ派の人と、自分のありのままを神に差し出した徴税人。徴税人の祈りこそ、神が喜ばれる祈り、神との正しい関係を表すものだったのです。

私たちは日々、自分の弱さや悪さを克服することに力を注ごうとします。もちろん、それはとても大切なことなのですが、しかしそこには、自らの行いや力に頼り、自らを誇り、神から離れてしまう落とし穴が潜んでいます。イエスは、弱さは神の憐れみに出会うための入り口、門だと教えています。自らを、弱さもろとも神の前に差し出し、神に頼って生きたいと願うとき、十字架上で最も弱い者となってくださったイエスが、両手を広げて迎えてくださいます。そしてイエスに迎えられ、神と共にある命に生きるところに、私たちが本当の意味で、神に喜ばれる道が開かれます。

イエスが来られたのは、「正しい人を招くためではなく、罪人を招くため」です。私たちは主の前にどのように立ち、祈っているのでしょうか。自らを省みます。